

トルコの日本語教育史

——その始まりから現況まで——

松澤芙美子・関正昭

はじめに

トルコでは2010年を日本との交流120年の節目として「トルコにおける日本年」と位置づけ、両国の経済・教育・文化間交流をさらに推進すべく、様々な記念事業が展開された。その前の2003年には「日本におけるトルコ年」も開催されている。こうした中で、2000年以降の日土関係史研究は、両国の交流の始まりとされる「エルトゥールル号事件（1890年）」¹⁾ 関連研究をはじめとしてこれまでの友好の歴史を再確認するかのようになり、盛んに行なわれるようになった。

一方、トルコにおける日本語教育もまた、日本語学習者数を年ごとに伸ばし2006年度の国際交流基金の調査²⁾ によると、総学習者数は中近東地域内ではトップとなった。2006年度以降も毎年のように、複数の大学で日本語選択科目が新規に開講されている。

しかし、このような状況下にあって、本格的なトルコの日本語教育史研究は未開拓のままである。一部に、歴史的記述があったとしても、それはトルコ現地の日本語教育従事者の報告文である。そこでは、トルコの日本語教育史の始まりは1976年の日土婦人友好文化協会イスタンブール支部による日本語講座と見なされている。が、近年の日土関係史研究に目を向けると、三沢（2003）・（2007）・（2008）によって、1891年に野田正太郎がコンスタンティノープル（現イスタンブール）の陸軍士官学校で日本語を教授していた事実が明らかにされており、本稿の執筆も三沢の一連の研究が一つの契機になっている。

この小論ではこれまでの日本語教育史研究における未開拓の領域ともいえるべきトルコの日本語教育史の始まりを解明することに主眼を置き、さらに欧米諸国・中東諸国における日本語教育史との比較を行なうことによってその特色を探る。

本研究を進めるにあたっては、まず日土関係史研究をもとに史実としての日本語教育の有無の確認から始めたが、野田正太郎の日本語講座のほかに日本語教育が行なわれたという手掛かりは得られなかった。野田の日本語講座については三沢（2003）・（2007）・（2008）の関連論文を参考にしながら、三沢論文で示された巻号と日付などを手掛かりに野田の投稿記事を読むことによって史実の検証を行なった。戦後のトルコの日本語教育史については、主に国際交流基

金の調査結果と現地日本語教師の報告文などを参考にした。また、比較対象国の日本語教育史研究のうち、欧米諸国の日本語教育史は小川（2010）と木村編（1991）を、中東諸国の日本語教育事情については、現地に派遣された日本語教師の報告文を、また、マクロヒストリア的に日本語教育史を概観するには、関（1997）の日本語教育史の時代区分法や年表を参照した。

1. オスマン帝国時代の日本語講座

1.1 エルトゥールル号事件と野田正太郎

オスマン帝国時代の日本語教育史の一端は、三沢（2003）によって明らかにされたが、果たしてそれ以前のトルコでは日本語教育は行なわれていなかったのだろうか。そこで、本稿では日本・トルコ関係史に登場しオスマン帝国に滞在した邦人の動向を探ってみた。その結果、1890年までの邦人のトルコ滞在はいずれも短期間で主にオスマン帝国の国情を視察する目的で行なわれたことがわかった。また1890年代以前にはトルコ人の来日者や日本と深い関わりを持ち日本語を話すことのできる人物に関して記録した資料もないことがわかった。つまりこれまでに見つかっている史料に拠るならば、トルコにおける日本語教育は、1891年の野田正太郎による日本語講座を嚆矢とすると判断してよいだろう。

野田の存在は、これまで日土関係史上でその名前が挙がることはあっても詳細は不明であったが、三沢（2003）・（2007）・（2008）によって次々に明らかにされ、同時に日本語を教授していた事実も公のものとなった。三沢（2003）に拠り、野田がオスマン帝国で日本語教育を行なった経緯をまとめると次のようになる。

野田は1868年に青森県陸奥国三戸郡八戸町において士族の長男として生まれ、その後、上京して慶應義塾で経済学、英学、倫理学を学んだ。卒業後は福澤諭吉によって創立された時事新報社に入社し、新聞記者となった。同社はエルトゥールル号事件後、紙上で義捐金を募集し、野田をその受渡人に任命した。オスマン帝国までの派遣には、エルトゥールル号事件の生存者を送還するために日本側が用意した軍艦金剛と比叡の2隻のうち、野田を比叡に同乗させ、送り出した。1891年1月2日、軍艦金剛と比叡はオスマン帝国に到着し、アブデュル・ハミト二世との謁見や、宮殿訪問、軍事施設の見学、欧米各国の公使らとの面会のために約2カ月滞在した。一方、唯一の民間人であった野田は、1月6日に海軍省へ赴き義捐金為替証書をエルトゥールル号の遺族救済委員会に手渡した。時には比叡・金剛の日本人士官らと公式行事に参加することもあったが、単独で現地のマスコミ関係者らと交流を持つなど、その行動はそれほど制限されていなかったようである。

また、野田はオスマン帝国へ向かう航海中の船上で、トルコ人らと親密な関係を築いてオスマン・トルコ語の習得に力を入れており³⁾、そうした野田の積極的な行動がアブデュル・ハミト二世にまで伝わり、直々に長期のトルコ滞留を要請されるに至ったと言われている。1891年2月10日、軍艦比叡と金剛は任務を終え、コンスタンティノーブルを出港した。野田は一人残り、新聞記者として時事新報に記事を送って現地の情報を伝えるとともに、トルコ語の習得と、トルコ人士官に対する日本語教育を始めた。

1.2 陸軍士官学校における野田正太郎の日本語教授

オスマン帝国の歴史は長く600年もの間に陸軍教育も常に変容しているため、ここでは主に19世紀後半から20世紀にかけての陸軍教育について纏められた Çam (1991) に基づき、野田が日本語を教えていた陸軍士官学校についてその概要を述べる。

当時の陸軍教育は大きく分けて3段階あった。現代の中等教育期間にあたる陸軍中学校 (Rüştiye) と陸軍予備士官学校 (İdadi), そして最高学府にあたる陸軍士官学校 (Harbiye) である。1891年頃の教育期間は、陸軍中学校4年、陸軍予備士官学校4年、陸軍士官学校3年であった。各学年によって週の授業時間は異なるが、概ね週14時間から週21時間ほどで、陸軍中学校ではトルコ語や数学、理科、社会、外国語、応用の授業などがあり、特にトルコ語の授業時間が最も多く、次いで外国語科目⁴⁾に重点が置かれていた。陸軍予備士官学校では、特に化学と外国語の授業数が多く、修了すると階級が与えられた者にも陸軍士官学校への入学資格が与えられた。Çam (1991) に取り上げられている1892年頃の記録によると、陸軍士官学校では総勢233名の士官が学んでいたことがわかる。1年目の授業では、写真が普及していなかったことと地図資料が不足していたため、地誌学と地図を製図する授業が最も多く行なわれており、全ての士官らに製図の習得が課されていた。その他に化学や外国語科目があり、フランス語のほかドイツ語やロシア語の授業も組み込まれていた。

では、野田が7名の士官を相手にどのような日本語講座を開いていたのだろうか。記事⁵⁾によると、日本語の教え方について悩み、試行錯誤している野田の様子がうかがえる。たとえば、日本語の話し言葉と書き言葉の違い、「行く」を場合によっては「参る、伺う、いらっしゃる、御出で」のように使う例を挙げ、これらを勉強熱心な学習者にどのように教えるべきか、日夜を問わず日本語の研究に励むほどであったことを明かしている。その結果、日本語の文法規則について、動詞の活用を「規則動詞」と「不規則動詞」の2つに分類し、記事⁶⁾にその表を掲載している。野田はこうして日本語の文法規則を分析して教える傍ら、カタカナやひらがなを一時間半ほど習字させたり、生徒を集めて会話をさせたりしていた。その授業の様子は野田の言葉を借りれば、一日はひたすら日本語を語り聞かせて、一日は仮名を黒板に書き写させて暗記させ、一日は自分がトルコ語でテーマを作ってそれを日本語に訳させる、一日はトルコ語の文章を与えて日本語に翻訳させる、と。このような授業を繰り返して行ない、4ヶ月が経つ頃には個人の能力にもよるが、大抵話すことはできるようになり、その会話レベルと同程度に書くこともできるようになると述べている。学習者らの実際の日本語能力については次節で紹介する士官達の書いた日本語の手紙からその一端を垣間見ることができる。

1.3 学習者像（日本語の手紙から）

当初、2名の学習者から始まった日本語の指導は、1891年8月22日発信⁷⁾の記事で7名にまで増えたことを伝えている。その7名とは、陸軍大尉レジェブ・エフェンディ (Recep Efendi), 海軍少尉サブリ・エフェンディ (Sabri Efendi), 陸軍少尉アリ・エフェンディ (Ali Efendi), 陸軍少尉アースム・エフェンディ (Asım Efendi), 陸軍少尉シェヴキ・エフェンディ (Şevki Efendi), 陸軍少尉スレイマン・エフェンディ (Süleyman Efendi), 陸軍少尉ヴァス

第2号 (2012)

フ・エフェンディ (Vasif Efendi)⁸⁾である。

野田が時事新報に寄せた記事⁹⁾によれば、コンスタンティノープルに滞在しはじめた頃、陸軍大尉レジェプ・エフェンディ¹⁰⁾ (Recep Efendi) と海軍少尉サブリ・エフェンディ (Sabri Efendi) の2人が野田に付き、両氏から野田はトルコ語を習い、野田は日本語を教えはじめた。しかし、この頃の日本語教授に関する具体的な記述は見られない。ここでは「日本狂と呼ばれた学習者」と「日本語の手紙」と題された記事から学習者の様子を紹介する。

野田は自身の記事において、日本語を教えている7名の士官らは極めて優秀な者から選ばれているだけあって日本語の上達が驚くほど早いと述べ、中でもヴァスフ・エフェンディ¹¹⁾ (Vasif Efendi) を、非常に熱心なその学習態度から「日本狂」と名付けて紹介している。記事¹²⁾によれば、陸軍少尉ヴァスフ・エフェンディは、寝食を忘れてと言っても過言ではないほど日本語の勉強に熱心で、道を歩く時も食事の時も日本語を口にするとところか、自室にこもって壁に向かって日本語を練習するほどの「日本狂」であったと言う。

ヴァスフ・エフェンディを筆頭に勉強熱心な士官7名に日本語を教え始めた野田であったが、当時のオスマン帝国には日本語の文献や習字をするために必要な道具がなかったため、そのことを日本にいる時事新報社の同僚である今泉秀太郎¹³⁾ に伝え、日本語で書かれた本¹⁴⁾ と習字に必要な墨と硯、筆などの送付を要請した。トルコ人士官の書いた日本語の手紙は、日本から教材を送ってくれた今泉へのお礼の手紙であった。その士官達¹⁵⁾ の手紙は、今泉の著書¹⁶⁾ と野田の記事¹⁷⁾ で紹介されているが、レジェプ・エフェンディの手紙は直筆で掲載されており、その内容は下記の通りである。

野田の言葉によると、レジェプ・エフェンディの手紙は「右は實際師匠なる小生が一點も手を入れざるものに有之候」と野田の添削指導もなくそのまま送られたという。そして「筆勢ナント旨いものではありませんか」と誉め、日本語で書かれているが「土耳其の口調」そのまま「少々宗教に熱する文意にて知らるるが如し」と紹介している。その言葉通り、手紙はまず「拝啓 本来きやうだいです。なぜならぞうぶつしゆが、ひとつです。性来またきやうだいです。なぜなら、できたげんそが一つです。」と始まっており、つまり文中の「造物主」とはイスラム教の唯一神アッラーのことを指し、その「造物主」から造られた我々人間（ここでは特にトルコ人と日本人）は兄弟であると言っている。手紙はこのように冒頭に「造物主」の話から始まり、後半には感謝を神に関連付けて綴っている。野田は、レジェプ・エフェンディの日本語は手紙を書いた4名の中でも特に学力と筆力に長けていたと述べている。他3名の手紙の直筆は掲載されていないが今泉（1901）にその内容が紹介されているので、それを本稿末尾の参考資料に掲げた。

2. 戦前～戦後のトルコにおける日本語教育

2.1 日本語教育空白期

野田は1892年4月16日付けの記事に、遠からず自分はトルコを去り日本へ帰る予定であることを語っている。その言葉通り1892年12月末、野田は自身の体調不良を理由に日本へ帰国し、

再びコンスタンティノーブルへ戻ることなく1904年に病死した。そこで気になるのは野田の日本帰国後の陸軍士官学校における日本語教育であるが、Çam (1991) によると1901年度¹⁸⁾ 陸軍士官学校授業科目リストには、日本語科目が存在している。リストによれば当時、4名の士官¹⁹⁾ が日本語教官²⁰⁾ として従事しており、10年前の少尉から大尉²¹⁾ に階級が変わってはいるものの、名前が一致することから野田の教え子である可能性が高い。このリストから判断すると、野田帰国後のオスマン帝国では日本語教育が少なくとも1901年の段階では行なわれており、4名の教官とそれに相応する受講者と何らかの学習目的があったと推察できる²²⁾。

また、野田が日本語を教えていた頃、コンスタンティノーブルへやってきた山田寅次郎²³⁾ もまた、野田と同様に、オスマン帝国に滞在してトルコ語を学び、陸軍士官らに日本語を教えるようにアブデュル・ハミト二世から要請されている。しかし、山田が野田のように陸軍士官学校で実際に日本語を教えていたかどうかは野田の記事や山田の自伝²⁴⁾ では判然としない。その点について三沢 (2008) は、山田が当時コンスタンティノーブルで長期間に渡って日本語講師を務めていたという説を否定している。国交のない当時、在留邦人は僅少で²⁵⁾ 山田を含め滞在していた日本人による日本語教育の痕跡はこれまで全く報告されていない。さらに1914年に第一次世界大戦が勃発すると両国は敵対国となり、在留邦人は全くいなくなっている。

したがって、この時期の在留邦人による日本語教授の可能性はほとんど無いと言ってよい。が、前述したトルコ人士官達による日本語教育の継続の可能性については一考する価値があるように思われる。三沢 (2008) によれば1907年以降コンスタンティノーブルには日本陸軍から在外武官の派遣が始まっており、両国陸軍間で交流があったようであるが、公的な活動記録は見つかっていないため、この時期に日本語教育がなされていたかどうかは不明である。

2.2 1960年代のトルコにおける日本研究

第一次世界大戦後、1924年にローザンヌ条約が締結されると日本トルコ両国に大使館の設置や協会の設立²⁶⁾ が続き、1928年には日本トルコ通商条約が締結されたことを機に、イスタンブールに日本商品館が創設された。また、日本軍は駐在武官の派遣を再開し、イスタンブールへ練習艦隊派遣も行なわれるほど両国の交流は活発なものとなった。さらに1930年代になると、内藤智秀²⁷⁾ や大久保幸次²⁸⁾ のようなトルコ学・イスラム学分野の日本人研究者が登場し始める。こうして多方面における交流が深まっていたが、トルコ側が外国との貿易制限を行なったことと第二次世界大戦の勃発によって交流は終戦まで途絶えることとなった。終戦後、サンフランシスコ平和条約が締結され1951年に日本トルコ間の国交が回復したが、トルコにおける日本語教育の記録は今のところ発見されていない。

1960年にトルコを訪問してトルコにおける日本研究の実態を調査した寺川 (1964) によると、当時トルコで確認できた日本研究者は4名であると報告している。そのうちイスタンブールには2名おり、イスタンブール工科大学 (İstanbul Teknik Üniversitesi) 助手で日本木造建築物の研究者アリギュル・アイヴェルディと、同じく同大学の助手で日本の地震研究者シルヴァ・アイナジャン、アンカラにはトルコ経済省の職員で日本水産学と水産化学の研究者ムザフェル・オザイと土日議員友好団会長で上院議員でもあるフェリド・アルピスケンデル²⁹⁾ を

確認できた日本研究者として挙げている。

調査の際、寺川はイスタンブール大学 (İstanbul Üniversitesi) にも訪問しているが、その時の印象を寺川 (1961) では「イスタンブール大学では、もちろん本場のアルタイ言語学が盛んである。日本では、日本語がアルタイ語に含まれると言われるが、そのアルタイ語の講義の中で、日本語が多少論ぜられてはいるが、われわれ日本人が問題にしているほど、アルタイの本場では重要視していないようである。このような有様であるから、独立した日本学などは講じられてない。日本語を特別に研究しているという教授もいないようである。」と報告している。この点についてアンカラ大学 (Ankara Üniversitesi) 日本語日本文学科前主任教授のプラト・オトカン (Pulat Otkan) 氏もオトカン (1995) において1968年以降アンカラ大学における日本研究講座開設が幾度も試案されていたが、専門家の不在を理由に実行されなかったと語っており、つまり1960年代に入ってもトルコでは日本語を専門的に研究する者は現れず、日本語教育が行なわれていた形跡は見つかっていない。

2.3 日本語教育の再開

1976年に、アンカラにあった日土婦人友好文化協会にイスタンブール支部が設立されると、そこで一般人向けの日本語講座が開講された。これまでこの講座開設がトルコの日本語教育の始まりと見なされていたが、先述したようにトルコの日本語教育史の始まりは1891年の野田正太郎の日本語講座である可能性が高く、日土婦人友好文化協会のそれは「再開」と位置づけなければならない。80年代に入ると、イスタンブールとアンカラの主要大学で日本語が選択科目として開講されはじめ、1986年にはアンカラ大学においてトルコ初となる日本語日本文学科が開設された。90年代以降も飛躍的に日本語教育機関の数は増え、日本語ブームが巻き起こった。1976年から2000年までの日本語教育機関の設立については本稿末尾の参考資料 (年表) に掲げた。

3. トルコの日本語教育史の特色

3.1 欧米諸国との比較

トルコの日本語教育史の特徴・特色を、欧米諸国の日本語教育史と比較することによって探してみたい。欧米諸国のうち8ヶ国³⁰⁾に焦点を当て比較してみると、①日本人日本語講師の当該国への渡航目的 ②軍人に対する日本語教育の目的 ③比較言語学分野における日本語研究 ④日本語教育の発展と衰退の傾向とその要因、といった点で違いが見られる。

①では、日本語教育史黎明期において、イタリア、ドイツ、ハンガリーの日本人日本語講師は、まず留学目的³¹⁾で渡航しその留学先で教鞭をとるようになったケースが多いのに対し、トルコでは野田正太郎や山田寅次郎のように公務を担って渡航した人たちが教鞭をとっており、そこに違いが見られる。ただし、本来の渡航目的が日本語教授ではなく、渡航後に要請を受け日本語を教えるに至ったという点では共通していると言える。②では、1940年代からアメリカやイギリスで行なわれた軍人に対する敵性言語としての日本語教育と、野田正太郎のトル

コ士官に対する日本理解のための日本語教育とでは、その学習目的に相違点があったことは明らかである。③については、ハンガリーとフィンランドにおいてウラル・アルタイ諸語と日本語の比較研究が日本語教育へと発展していったのに対し、同じくアルタイ言語学が盛んであったトルコではそれが日本語教育に直結されなかったという違いが見られる。④に関しては、シーボルトが日本から持ち帰った膨大な文献資料によって19世紀後半以降西欧諸国では急速に日本・日本語研究が盛んになったという流れがあったが、トルコではそうした基盤や流れがない中で日本語教育が先行して始まったという点で違いが見られる。

3.2 中東諸国との比較——機関・学習者数の変遷から——

比較対象国（エジプト・シリア・イラン）のうち、エジプトとイランでは1974年の段階で現地日本大使館においてすでに日本語教育が行なわれていた。しかし、後掲の<図1>からもわかる通り、戦後の日本語教育史においてはトルコより開始年の早かったエジプトでは、長らく機関数の変化は見られず、90年代に入るまでカイロ大学と大使館でのみ日本語教育が行なわれていた。また、イランもエジプトと同じくトルコよりも早い段階で日本語教育機関が存在していたが、80年代のイラン・イラク戦争後の不安定な国内情勢に左右された結果、機関数は減少・横ばいの状況が続いている³²⁾。シリアもまた、1992年に国立科学技術研究所で日本語講座が開始されるまで現地の日本大使館における日本語教育が唯一であった。これに対して、トルコはこれらの中東諸国に比べると開始時期は遅れるものの、急速に機関数を伸ばしていることがわかる。特に90年代は機関数の増加が顕著に見られ、イスタンブールやアンカラのような主要都市にある高等教育機関では選択日本語科目が相次いで開講された。90年代前半にはすでに、3つの大学で日本語を専門とする独立した学科が設立されており、1992年にはイスタンブールとアンカラの高校で日本語科の設置があった点なども他の中東諸国には見られない特徴である。

一方、日本語学習者数の推移においては、トルコでは1990年から1998年までの8年間で約2.5倍に、1985年の調査結果と比べるとその数は約10倍となっており、驚異的な増加傾向を示している。一方、エジプトの学習者数は安定した伸び率を示してはいるが、トルコのような急激な学習者数の増加は見られない。両国は90年代を境に学習者数が逆転しており、それまで中東地域における日本語教育の中心的存在であったエジプトを機関数と学習者数においてトルコが上回り今日に至っている。

3.3 トルコの日本語教育の現況

トルコと中東諸国における日本語教育従事者について、国際交流基金やJICAによる日本語教師の派遣記録に基づいて比較した結果、中東諸国では開設以来現在まで両機関からの派遣が継続されている一方、トルコでは開設から数年で終了しているという点で違いが見られる。また、トルコにおける日本語教育のもう一つの特徴として、トルコ人日本研究者による学科開設とトルコ人主体による学科運営が挙げられる。

アンカラ大学では、1986年の日本語日本文学科発足時より国際交流基金から3名の日本人客

員教授が派遣されていたが、1989年以降日本語教育専門家は1名に減られその状況が2000年まで続いた。しかし、その後はトルコ人スタッフを主体とした学科運営がなされている。

日土婦人友好文化協会イスタンブール支部の日本語講座は、1976年に東京大学教授護正雄によって開設され1988年までの間、国際交流基金日本語講座助成金が交付されていたが、専門家の派遣は行なわれていなかった。またチャナッカレ3月18日大学（Çanakkale Onsekiz Mart Üniversitesi）には、1993年より国際交流基金日本語教育専門家の派遣が行なわれていたが、1997年をもって終了している。

現在、トルコの日本語教育機関では、アンカラの土日基金（Türk Japon Vakfı）の日本語講座へ2000年の開設以来日本語教育専門家が継続派遣されているが、その他の機関への派遣は行なわれていない。また2000年以降に新規開講された日本語講座の一部³³⁾では、JICAによる派遣が行なわれていたが、現在は主にトルコ人日本語講師に引き継がれている。

トルコ人日本研究者による日本語教育の創始者としては、次の3名が代表的な人物として挙げられる。1986年のアンカラ大学日本語日本文学科開設に貢献した東洋学者プラト・オトカン教授と1988年のボアジチ大学（Boşaziçi Üniversitesi）文理学部歴史学科における日本語講座を開講した日本研究者セルチュク・エセンベル教授、そして1993年のチャナッカレ3月18日大学にトルコ初となる日本語教育学科を創立したメテ・トゥンジョク教授の3名である。トルコの日本語教育は、上記3名をはじめ80年代に日本留学経験のあるトルコ人若手研究者らによってその基盤が作られたと言ってよいだろう。

トルコの日本語教育の特色としては、日本語教育学科と中等教育機関における日本語教育も挙げられる。1993年にチャナッカレ3月18日大学外国語教育学部に開設された日本語教育学科は、中近東地域で唯一の日本語教師養成を目的とした学科である。中等教育機関における日本語教育は、1992年にイスタンブールとアンカラの高校³⁴⁾で日本語学科が設立されている。近藤（2005）は「1991年に当時の首相スレイマン・デミレル氏が日本を訪問した。日本との関係を深めていくためには、日本語が理解できる人材が必要であるとの認識から、翌年1992年にイスタンブールとアンカラの高校に1校ずつ第一外国語として日本語の教育が導入された。この2校に続いて、他の高校でも日本語が導入されることが予想されたため、特に日本語教師養成を目的とする日本語教育学科として設置された。」と学科創立の背景を述べている。

以上、トルコにおける日本語教育の現況を見てきたが、特に80年代におけるトルコ国内のトルコ人日本研究者の果たした役割は大きいと言える。学科開設はもとより、その後も日本学の後継者育成を目的とした大学院設置や日本の大学との密接な学術交流などでトルコの日本語教育の発展に大きく貢献している。

現在のトルコでは、アンカラ大学やチャナッカレ3月18日大学、エルジェス大学（Erciyes Üniversitesi）などの日本語の専門学科を有する機関におけるトルコ人日本研究者育成の動きが活発である。大学で日本語を専門的に学んだ卒業生のうち、成績優秀で将来性のある学生には日本留学を推奨している。日本の大学で日本語学や日本語教育学の分野を専攻して博士号を取得し、再びトルコの母校に戻るという計画である。これは、日本でより専門的な知識を得た卒業生が学科運営の中心的存在となることによって、トルコ人主体の日本語教育を目指すもの

である。このような計画が実施されたことによりチャナッカレ3月18日大学出身者のトルコ帰国はすでに始まっているという報告もある。

このように日本語教育の「現地化」は、これからの日本語教育の発展の可能性を担保する一つの条件となり、また、「現地化」ということはアドミニストレーションの面だけでなく、その地域独自の教授法や教材開発の発展の可能性も示唆している。

おわりに

日本語教育史研究は、ミクロとマクロの両視点からの調査・考察が必要である。その意味で、本稿は野田正太郎の日本語教授の足跡をその関係資料を通してミクロの視点から追う一方、トルコにおける日本語教育の歴史と現状を欧米諸国・中東諸国との比較によってマクロの視点からとらえることを試みた。しかし、ミクロというにはまだ粗くマクロというには体系的記述が不足していることを筆者自身が自覚している。今後、さらに新資料の収集や各種調査を行ない、トルコの日本語教育史をより精確かつダイナミックにとらえることに努めていきたい。

注

- 1) 軍艦エルトゥールル号の事件の顛末はおおよそ次のとおりである。エルトゥールル号は日本の和歌山県沖で台風に遭い沈没し、使節団の乗船者約600名のうち、生存者は69名という大惨事となった。その沈没直後、和歌山県の樫野崎周辺の浜辺には、多くの乗船者たちが流れ着いた。当時の模様は、救助活動に加わった村民らの記録から実態解明の研究が行なわれ、現代にまで伝えられている。樫野崎灯台には深夜から早朝にかけて負傷した乗組員53人が押し寄せ、救助を求めた。生存者たちは、村民総出で近くの寺に移され、村の医師7名によって初期治療が施された。村民はその手当ての手助けを行ない、食料を持ち寄って生存者69名の食事を、凶作の年にもかかわらず賄った。また、海岸に漂着したおびただしい数の遺体を引き上げ、数が多くなると新しい墓地を作り、手厚く埋葬した。一方、治療に当たった村の医師たちは、この時にかかった薬代や治療費一切をすべて無料で提供した。村民の懸命な救護と治療を受けた生存者たちは、沈没から6日後の9月21日神戸へ移送され、日本赤十字社の医師や看護婦たちの治療によって順調に回復し、その後本国へ送還された。当時、587名が死亡または行方不明となったことで、日本国内では「エルトゥールル号事件」として大きく報じられ、全国から各新聞社を通じて義捐金が集められた。翌月になると生存者たちは、明治政府によって用意された軍艦比叡と金剛でオスマン帝国へ送還されることが決定した。こうした遭難者の救護や搜索活動、埋葬への配慮、遺品の回収、埋葬地での追悼式などを行なった村民たちの行動は、トルコ政府に伝わり1893年、大島村に同政府から3000円が贈られた。
- 2) 国際交流基金(2006)『海外の日本語教育の現状——日本語教育機関調査・2006年——』 凡人社
- 3) 『時事新報』2854号、1891年1月30日
- 4) アラビア語、ペルシャ語、フランス語
- 5) 『時事新報』3151号より
- 6) 『時事新報』3318号、1882年4月16日刊
- 7) 『時事新報』3151号、1891年10月4日刊

- 8) 『時事新報』 3253号, 1892年 1 月31日より
- 9) 『時事新報』 3030号, 1891年 5 月25日
- 10) エフェンディ Efendi はトルコ語の敬称である。
- 11) 記事ではワスフ・イフエンダーとなっている。
- 12) 『時事新報』 3151号, 1891年10月 4 日
- 13) 福澤諭吉の甥でもある。
- 14) 野田の記事には「小学校用作文書（全 8 冊金港堂出版）」とある。
- 15) 野田によって特に「意の通じそうなものを」4 通選んで送られた。手紙の主は、陸軍大尉レジエブ・エフェンディ、海軍少尉サブリ・エフェンディ、陸軍少尉アリー・エフェンディ、陸軍少尉アースム・エフェンディである。
- 16) 今泉（1901）
- 17) 『時事新報』 3252号「土耳其軍人日本字の書簡」（1892年 1 月31日）
- 18) ヒジュラ暦1310年
- 19) Ali Efendi, Asım Efendi, Şevki Efendi, Süleyman Efendi の 4 名
- 20) 「Japon Lisanını Tahsile Memur」Çam（1991）p.135
- 21) Yüzbaşın
- 22) アブデュル・ハミト二世には汎イスラム主義を推し進めてイスラム教圏を極東アジアまで拡大させたい狙いがあった。エルトゥールル号日本派遣はその一端であったという見解もある。アブデュル・ハミト二世が野田に日本語教育を要請したのも、イスラム教布教を含めた将来的な日本との関係構築を視野に入れた準備であったと捉えることができ、その目的は引き継がれていたと推察される。
- 23) 1866年に東京で生まれ、漢学や英語、ドイツ語、中国語などを横浜の英和学校とフランス人が経営するサラベル学校で学んだ。東京薬学校で薬学を学んだこともある。その後新聞『日本』の創刊者である陸羯南と交流を持った。24歳のとき、「エルトゥールル号事件」が起き、新聞関係者との交流や出版事業に携わっていた経験を生かして、同事件の生存者への義捐金募集活動を始め、1年以上各地を奔走して義捐金を集めた。時の外相からその活動を評価されオスマン帝国行きが決定した。
- 24) 山田寅次郎（1911）『土耳其画観』博文館
- 25) 僅か 2 名（山田寅次郎と中村健次郎）と伝える記事もある。読売新聞1909年 4 月28日朝刊 2 ページ目
- 26) 1925年日土貿易協会、1926年日土協会設立。
- 27) 在トルコ日本大使館で一等通訳官を務めた後エルトゥールル号事件に関する研究書『日土交渉史』泉書院を1931年に刊行、1936年には日土協会から『日土土日大辞典』を編纂刊行している。
- 28) 1936年から国際文化振興会から研究奨励金を受けてトルコに派遣され、帰国後イスラム学会を創設、1938年には回教圏研究所を設立したイスラム学研究者。
- 29) İstanbul teknik üniversitesi Aligül AYVERDİ, Silva AYNACYAN, Muzaffer OZAY. Türk-Japon parlamentolarası dostluk gurubu Ferid ALPİSKENDER
- 30) アメリカ、イギリス、フランス、オランダ、イタリア、ドイツ、ハンガリー、フィンランド
- 31) ドイツではドイツ文学や哲学をはじめとする豊富な留学制度があり、イタリアでは芸術分野を専門に学びに、ハンガリーでは交換学生としてハンガリー語を学びに来る日本人留学生が多く滞在していた。
- 32) イラン・イラク戦争中であったイランの1984-85年の調査結果報告はない。
- 33) 2004年に日本トルコ友好協会日本文化センターで日本語講座が開講し、2006年まで JICA シニアボランティアの派遣が行なわれていたがその後トルコ人講師によって引き継がれた。2005年に開講したメルシン市職業訓練センターでの日本語講座には、2005年から2008年までやはり JICA

シニアボランティアの派遣が行なわれていた。

- 34) イスタンブール商工会議所アナトリア商業高校 (İstanbul Ticaret Odası Anadolu Ticaret Meslek Lisesi) とトゥルク・テレコム・アナトリア工業専門学校 (Türk Telekom Anadolu Teknik Lisesi)。

参考文献

- 池井優・坂本勉編 (1999) 『近代日本とトルコ世界』 勁草書房
 今泉秀太郎述, 福井順作記 (1901) 『一瓢雑話』 誠之堂
 小川誉子美 (2010) 『欧州における戦前の日本語講座——実態と背景——』 風間書房
 木村宗男編 (1991) 『講座日本語と日本語教育 第15巻 日本語教育の歴史』 明治書院
 小松香織 (1990) 「エルトゥールル号事件とオスマン帝国」 『日本中東学会年報』 No.5 日本中東学会, pp.113-171
 小松香織 (1989) 「アブデュル・ハミト二世と十九世紀末のオスマン帝国——“エルトゥールル号事件”を中心に——」 『史学雑誌』 98-9 pp.40-82
 近藤幸子 (2005) 「チャナッカレ・オンセキズ・マルト大学日本語教育学科機関報告」 『日本語教育連絡会議論文集』 vol.17, 日本語教育連絡会議事務局, pp.93-97
 関正昭 (1997) 『日本語教育史研究序説』 スリーエーネットワーク
 寺川喜四男 (1961) 『全ヨーロッパにおける「日本学」実地調査報告 (第二部)』 安藤記念会国語研究所
 寺川喜四男 (1964) 『全ヨーロッパにおける日本語教育の歴史と現況』 法政大学出版局
 プラト・オトカン (1995) 「トルコにおける日本語教育」 『世界の日本語教育〈日本語教育事情報告編〉』 第2号, 国際交流基金日本語国際センター, pp.129-130
 三沢伸生 (2003) 「1890年～93年における“時事新報”に掲載されたオスマン朝関連記事：日本人初のイスラーム世界への派遣・駐在新聞記者たる野田正太郎の業績」 『東洋大学社会学部紀要』 第41-2号, 東洋大学社会学部, pp.109-146
 三沢伸生 (2007) 「最初の日本人ムスリム：野田正太郎 (1868-1904年)」 『日本中東学会年報』 23 (1), 日本中東学会, pp.85-109
 三沢伸生 (2008) 「オスマン朝における日本語教育の創始 (1891～92)：陸軍士官学校における野田正太郎の講義」 『東洋大学社会学部紀要』 第46-1号 東洋大学社会学部, pp.219-248
 Yusuf ÇAM (1991) *AtaTürk'ün okuduğu dönemde Askeri okullar: Rüştîye-İdadi-Harbiye (1892-1902)*, Genelkurmay Basım Evi, Ankara

参考資料

1976年から2000年までの日本語教育機関設立年表

開始／年	日本語教育機関名	学科／コース	選択科目	場 所
1976年	日土婦人友好文化協会イスタンブール支部	日本語一般公開講座		イスタンブール
1978年	アンカラ大学	中国学科	○	アンカラ
1985年	イスタンブール工科大学		○	イスタンブール
1986年	アンカラ大学	日本語日本文学科		アンカラ
1988年	ボアジチ大学	文理学部歴史学科	○	イスタンブール
1989年	アンカラ大学大学院	修士課程設置		アンカラ
	中東工科大学	現代語学科	○	アンカラ
1990年	アンカラ大学附属首都短期大学	観光学科	○	アンカラ
1991年	日土友好協会	日本語講座		アンカラ
1992年	アンカラ大学大学院	博士課程設置		アンカラ
	トルコ日本文化研究協会	日本語講座		アンカラ
	ラジオ・テレビ・アナトリア工業高等専門学校	日本語科		アンカラ
	イスタンブール商工会議所アナトリア商業高校	日本語科		イスタンブール
1993年	TÖMER トルコ語教育センター	日本語コース		アンカラ
	チャナッカレ 3月18日大学	日本語教育学科		チャナッカレ
1994年	私立ビルケント大学	観光学科	○	アンカラ
	エルジェス大学	日本語日本文学科		カイセリ
1995年	日本文化情報センター	日本語教室		イスタンブール
1996年	私立ビルギ大学		○	イスタンブール
1997年	カドゥキョイ保険・教育財団	日本語講座		イスタンブール
	私立バシュケント大学	アメリカ文化・文学部	○	アンカラ
	ハドサン日本語講座	日本語講座		イスタンブール
2000年	土日基金文化センター	日本語講座		アンカラ

今泉（1901）より レジェプ・エフェンディの日本語の手紙

「拝啓 本来きやうだいです。なぜならぞうぶつしゆが、ひとつです。性来またきやうだいです。なぜなら、できたげんそが一つです。しかし、にんじやうも、これほど、これほど、たなじく、これほどちかいことは、じつに、おどろくべきことです。これは、ぞうぶつしゆの、ふたつのじんしゆえ、くだした一つめぐみできたことでせう。またもともとこの二つのくにが一つの人しゆでありた、しるしでせう。さて、このふたつのくにはちよつとしたえんで、たがひに、したしむ、そのありさまは、たとへば、まるで一方の人がたの方に、ぞくしてゐるやうでした。これすなわち其もとが、あるからでせう。われわれのせんせい、のださんが、とるこごけんきうに、ちやくがん、せられたのも、私どもが日本ごを、べんきやうするの、みなこのわけからです。さて又がくもんの、べんきやうはむろん、よいせんせいに、よりますけれども、ほんとうに、ならふには、よむなかだちの、くわんぜんに、きします。われわれのかしこい、あいらしいせんせいが、ひちやうの、ごじんりよくで、わたくしどもを一ばんかんたんな、みちから、のぞむところえ、つれてゆくごころを、おいとひなさらないので、はなすことは、ずゐぶん、ぢゆくれんが、できましたけれども、ほんをよむことは、なれませんでしたから、日本の本は只の、一ぎやうでも、いみを、とるにほねを、おりました。これがありがたくなって、どうしませう、どうしてかんしやせず、ゐられませう、お名を、ききましたのみ、あのよでほか、おめにかからなかつたそのあなたが、このこんなんを、おときくさへました、だんだんしんぼするように、わたくしともえ、そうとうな本を、おめぐみくださいました。そのほんのあたひは、みたところでは、なんでも、ありませんけれども、わたくしどもの、みにとり其ねをかんがへることができません。それでひちやうに、ありがたいのです。ますますごしんぼくと、ゆうちやうの、ながからんことをねがひます。

千八百九十一年十二月七日

とるこ、りくぐん大がくかうで日本ごのせいと

りくぐん大ゐ れじえつぶ

今いづみさま 』

今泉（1901）より

争^{しやう}は日本^{にっぽん}来^きま^まや^やう^うた^たい^いす。な^なぜ^ぜな^なら^ら
 ず^ずふ^ふつ^つし^しゆ^ゆが^が、ひ^ひと^とつ^つです。性^{しやう}来^きま^また^たき^き
 や^やう^うた^たい^いす。な^なぜ^ぜな^なら^ら、で^でき^きた^たげ^げん^んう^う
 か^かつ^つです。し^しか^かし、に^にん^んじ^じや^やう^うも、こ^これ
 は^はど^ど、た^たな^なじ^じく、こ^これ^はど^どち^ちか^かい^いこ^こと^とは、
 い^いつ^つに、ね^ねど^どろ^ろく^くべ^べき^きこ^こと^とです。こ^これ^は、
 ず^ずう^うふ^ふつ^つし^しゆ^ゆの、ふ^ふた^たつ^つのい^いん^んし^しゆ^ゆえ^えく^くた^たい^い
 た^たつめ^めく^くみ^みで^でき^きた^たこ^こと^とで^でせう。ま^また^たも^もと
 く^くこ^この二^につ^つのく^くに^にか^かつ^つのい^いん^んし^しゆ^ゆで^であ^あり
 た^たい^いる^るし^して^てせう。ま^まて、こ^このふ^ふた^たつ^つのく^くも^もは
 ち^ちよ^よつ^つと^とした^{した}え^えん^んで、た^たか^かひ^ひよ^よ、し^した^{した}い^いむ^む、
 う^うのあ^あり^りさ^さま^まは、た^たと^とへ^へば、ま^まる^るで、一^{いっ}方^{ぱう}の

人^{ひと}か^かた^たの^の方^{かた}に、ず^ずく^くし^して^てね^ねる^るや^やう^うで^でした^{した}。
 こ^これ^はす^すな^なわ^わぢ^ぢ其^{その}も^もど^どか^か、あ^ある^るか^から^らで^でせう。
 わ^われ^れく^くの^のせ^せん^んせ^いの^のた^たさん^{さん}か、と^とる^るこ^こ、け^けん
 き^きう^うよ^よ、ち^ちや^やく^くか^かん^ん、せ^せら^られた^たの^のも、^私わ^われ^れど
 も^もか^か日本^{にっぽん}こ^こを、べ^べん^んき^きや^やう^うす^する^るの^のも、み^みな^なこ
 の^のわ^わけ^けか^から^らです。ま^まて^て又^{また}か^か、い^いん^んの^のべ^べん^んき^き
 や^やう^うわ^われ^れも^もろ^ろん^ん、よ^よい^いせ^せん^んせ^いよ^よ、よ^より^りま^ます
 け^けれ^れど^ども^もぼ^ぼん^んと^とう^うよ^よ、な^なら^らふ^ふに^には、よ^よむ
 な^なか^かた^たち^ちの^のく^くわ^わん^んぜ^ぜん^んよ^よ、き^きし^しま^ます。
 わ^われ^れく^くの^のか^かし^しこ^こ、あ^あい^いら^らしい^いせ^せん^んせ^いか^か、
 ひ^ひち^ちや^やう^うの^のこ^こい^いん^んり^りよ^よく^くで、わ^わた^たく^くし
 ど^ども^もを^を一^{いっ}ぱ^ぱん^んか^かん^んた^たん^んな^なみ^みち^ちか^から、の^のず

今泉 (1901) より

むところえ、つれてゆく、くろくを、たい
 とひなさうないの、ではなすことは、すねふ
 ん、ちゆくれんか、てきましたたけれども、
 ほんをよむことはなれませんでしたから、
 日本の本は只の、きやうでもいみを、とる、
 はねを、たりました。これか、ありがたくなく
 て、ごうしませう、ごうしてかんしやせず、
 ぬられませう、た名を、ききましたのみ、あのよて
 はか、たのよか、らなかつた、のあな、たか、このこ
 んな、んを、たごきくた、さへました、たんく
 しん、ほ、するよろし、わたくし、ともえ、ううと
 うな本を、ためぐみくたさいました。うのほん

あたひは、みたところでは、なんでも、ありません
 けれども、わたくし、ごもの、みより、見ぬを
 かんが、つることか、てきません、うれで、ひちやう、
 ありがた、いのです。ますく、こしん、ほく、く、
 ちやうの、なか、からん、ことを、ねかひます。

千八百九十五年十二月七日

とるこ、りく、じん、大かくかうで、日本、この、せりと

今、つ、み、さ、ま

りく、じん、大、ね、れ、え、つ、ふ。

今泉 (1901) より

拜啓なんばおたがひにしらぬ中ですけれども四かいいていて
す、こんどのだせんせいへ、およこしなさいました日本の本の中で
一ふは私のわけまいに、おちましたいまい、で、だせんせいは本の
ないながらおしへて、いらつしやいました、こんどおよこしくださ
へましたから、すぐにその本をならひはじめました、おかげで、べん
りにならうことができ、すじつに、ありがたうございます、と
んしゆ、

千八百九十一年十二月三日

とるこりくやん大がくかうで
今いづみ様 日本とのせいと、
かいぐん少ぬ サ ブ リ
と、しんばう、みなく、さまへもよろしく

拜啓およこしなさいました本を、ゆふびんきよくから、うけとりま
した、ひじやうに、よろこびました、ごしんせつ、ありがとうございます、ごい
す、このありがたうを、どうぞおうけと、おねがひを、し、ます、この
ごしんせつを、は、か、さ、でも、わすれ、させ、ん、節、即、ち、死、ね、ま、で、し、の、意、なる、可、し
千八百九十年十二月三日

とるこりくやん大がくかうで日本とのせいと
りくやん少ぬ
あ か し

いまいづみ様

拜啓ゆふびんで、およこしくださいました日本とのほんを、うけと
り、まして、ひじやうに、よろこびました、このごしんせつ、ありがとうございます、
ごい、ます、ごい、ど、この本を、よみて、あなたのごしんせつを、おもひ
だ、し、さ、し、よう、わ、たく、しの、め、り、が、た、う、を、く、り、か、へ、し、さ、す、い、さ、さ、で
に、なら、ひ、ま、した、に、つ、ほん、を、で、め、な、だ、に、向、て、じ、う、ふ、ん、て、が、み、ど、か

七一

く、ことが、でき、ま、せ、ん、け、れ、ど、も、ご、め、ん、を、こ、う、む、り、な、ら、お、も、ひ、き
つ、て、こ、の、ゆ、ふ、び、ん、を、さ、し、あ、げ、ま、す、ど、う、ぞ、お、う、け、と、り、を、ね、が、ひ、ま、す
千八百九十一年十二月三日

とるこりくやん大がくかうで日本とのせいと
りくやん少ぬ
あ し す ひ

いまいづみ様

○英語を學ぶ人へ注意

英語を學ぶ人へ少し御注意申して置きたい事がございます。勿
論學校で修業をなさる方は申す迄もありませぬ以上等の言葉は
かりを覚えるのですから別に差支はありませぬけれど外國へ出
稼きをして居る人は言葉の善いも悪いも、そんな事は別段に撰
み事も見分ける事も出来ずに自然に覚える次第でありますから、

七〇

く、ことが、でき、ま、せ、ん、け、れ、ど、も、ご、め、ん、を、こ、う、む、り、な、ら、お、も、ひ、き
つ、て、こ、の、ゆ、ふ、び、ん、を、さ、し、あ、げ、ま、す、ど、う、ぞ、お、う、け、と、り、を、ね、が、ひ、ま、す
千八百九十一年十二月三日

とるこりくやん大がくかうで日本とのせいと
りくやん少ぬ
あ し す ひ

いまいづみ様

○英語を學ぶ人へ注意

英語を學ぶ人へ少し御注意申して置きたい事がございます。勿
論學校で修業をなさる方は申す迄もありませぬ以上等の言葉は
かりを覚えるのですから別に差支はありませぬけれど外國へ出
稼きをして居る人は言葉の善いも悪いも、そんな事は別段に撰
み事も見分ける事も出来ずに自然に覚える次第でありますから、

七二

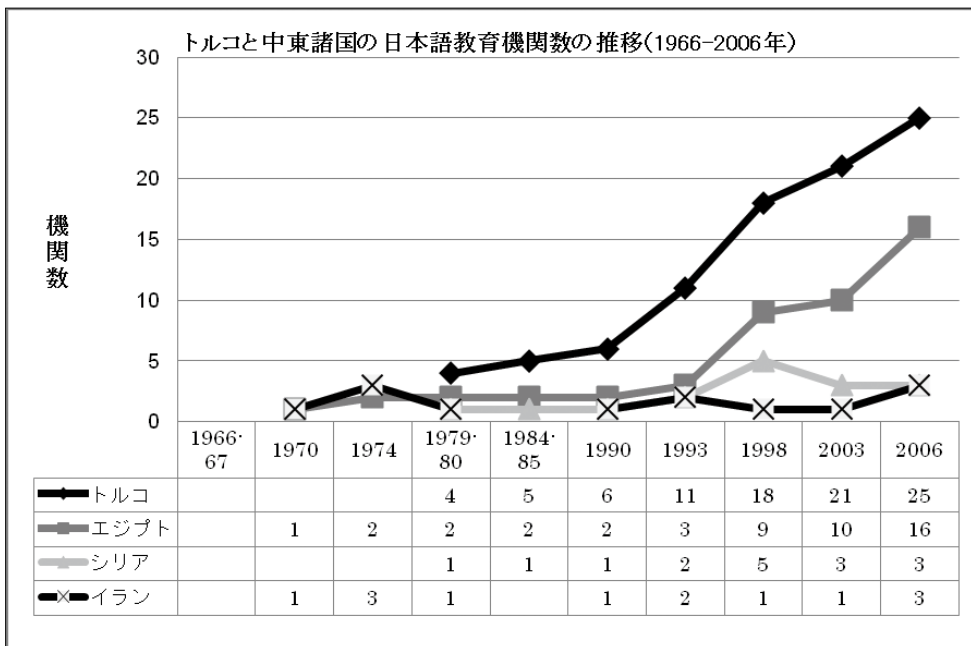


図1 国際交流基金『海外日本語教育機関調査』をもとに作成

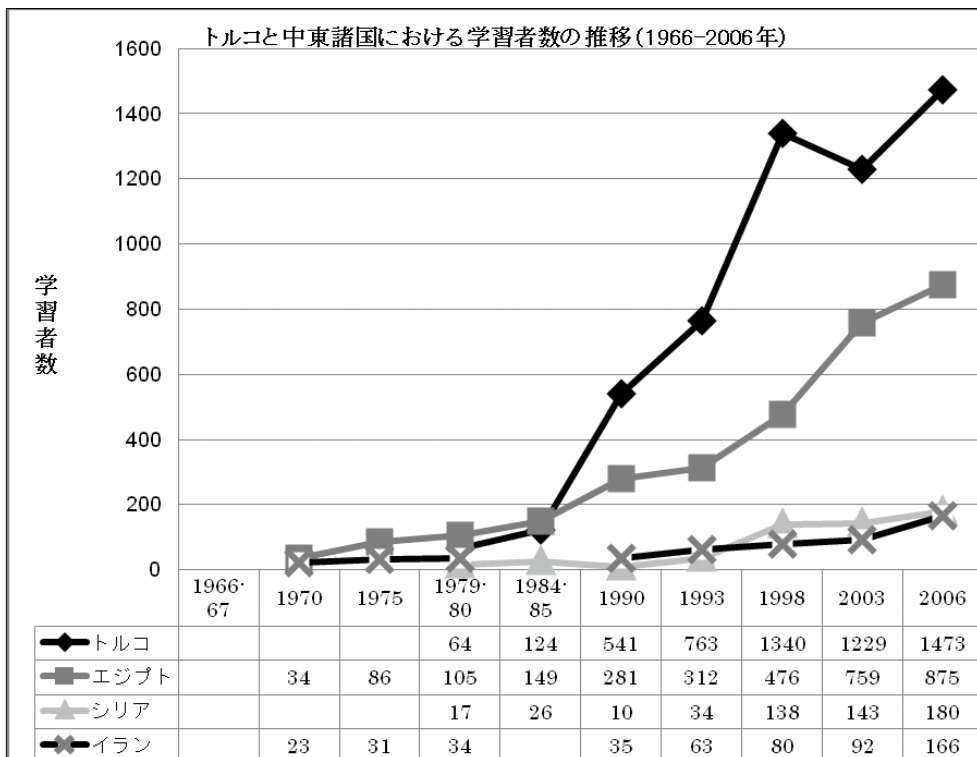


図2 国際交流基金『海外日本語教育機関調査』をもとに作成